

ロシア人、ウクライナ人に隠しきれない優越感がある

【ロシア・ウクライナ戦争（10）】ピョートル大帝以来、ロシアが建設したと教えられる

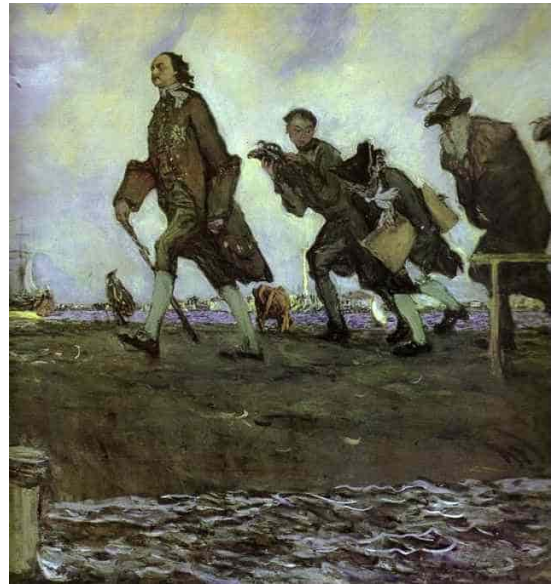
公開日：2022/08/28 (ワールド)

西谷 公明 (エコノミスト 元トヨタロシア社長)

ロシア軍がウクライナへ侵攻して半年が過ぎた。

世論調査（レヴァダセンター）によれば、プーチン大統領の支持率は70%台で相変わらず高止まりしたままである。

だがそれは、クレムリンの「プロパガンダ」のせいだけではないだろう。



視察するピョートル大帝=PD

あるいは、多くのロシア人がこの戦争に無関心でいるとしたら、そもそもそれはなぜなのか？

モスクワ勤務時代、従業員のなかにはウクライナ人も少なくなかった。ロシア人とウクライナ人の部下は仲良く仕事をし、同じ人生の時を共に過ごしていた。互いの国に家族や親類、友人が暮らす者たちも多かった。

2016年秋、そんな彼らと久しぶりの旧交を温める機会があった。

そのときには、すでに彼らが住むロシアは、アメリカやEU（欧州連合）から制裁される国になっていた。

彼らは口々に、最近では出張でヨーロッパを訪れてもなんとなく気まずくて、以

前のように明るい気持ちになどなれないとこぼしていた。そして、いまでは国内のウラルやシベリアの販売店を訪問する方が、おなじロシア人同士気が置けなくてかえって心が晴れると話してもいた。

その場に、ウクライナ人の元部下もいた。

「ウクライナはどうなるのかね？」

私が水を向けると、ロシア人のひとりが答えた。

「ロシアとウクライナはもともと兄弟国です。ウクライナは、いつかは気づいて元の鞆へ戻ってくるでしょう。ただし、あるとしても、それは遠い将来のことでしょうが・・・」

その言葉には、どことなく「上から目線」のニュアンスが感じられた。

18世紀、ピョートル大帝はウクライナを行政上、小ロシア（マロロシア）と名付けた（ただし、当時のロシア領はドニエプル河左岸、現在のウクライナ国土のほぼ東半分）。

ウクライナ人は小ロシア人と呼ばれた。そして、エカチェリーナ女帝はオスマントルコを破って、南の黒海沿岸に新ロシア（ノヴォロシア）県を設置し、ニコラエフ、ヘルソン、オデッサなどの諸都市を建設した。現代ロシアの人々はそういう歴史教育を受けて育っている。

ロシア人が古くからウクライナ人に対して抱く優越感にちかいメンタリティは、いまも心の奥から消えていないのではないか。

（なぜ彼らが米・欧を味方に付けてロシアに抗戦するのか？）

無関心の後ろに隠された、市井のロシア人の本音と言えよう。

プロフィール

最近の投稿



西谷 公明（エコノミスト 元トヨタロシア社長）

1953年生、長銀総研を経て1996年在ウクライナ日本大使館専門調査員。2004-09年トヨタロシア社長。2018年N&Rアソシエイツ設立し、代表。著書に『ユーラシア・ダイナミズム』『ロシアトヨタ戦記』など。岩波書店の月刊世界の臨時増刊「ウクライナ侵略戦争」で「続・誰にウクライナが救えるか」（2022年4月14日刊）を執筆。